

## 「道」の行方と学校体育：武道で何を教えるのか

The direction of the way of budo: What needs to be taught  
in budo within PE curriculum

檜 崎 教 子

Noriko NARAZAKI

福岡教育大学保健体育講座

水 月 晃

Akira SUIGETSU

崇城大学総合教育センター

本 多 壮太郎

Sotaro HONDA

福岡教育大学保健体育講座

則 元 志 郎

Shiro NORIMOTO

熊本大学教育学部

(平成29年9月28日受理)

### Abstract

This study aimed to examine what the contents of “the way” in karatedo, judo and kendo are and what needs to be taught in classes of PE through analyzing the developmental process of these martial arts from the past to the present and examining the future direction.

The results showed that karatedo, judo and kendo have all been spread internationally. Karatedo and judo have been spread as international sports, but kendo has been taking a stance of not changing it as a sport but maintaining it as a Japanese culture based on the spirits of *bushido*.

The results also showed that no matter how each martial art is spread to outside of Japan, these Japanese martial arts commonly at practitioners’ character building as the biggest and most important goal through training *waza*, body and mind.

In conclusions, as the contents of “the way” that students are encouraged to learn in classes of karatedo, judo and kendo, a respectful mind, self-control, an attitude to growing up together with sympathy and a spirit of pursuing justice were suggested.

キーワード：武道の「道」の行方, 空手道, 柔道, 剣道, 体育

Key words: The direction of ‘way’ of budo, Karatedo, judo and kendo, Physical education

## I 緒言

教育基本法が改正され、「我が国の伝統と文化を尊重する態度を養う」という教育基本法の目標を具現化するための一つとして、学校体育授業において武道が必修化された。

これを受け、中学・高校体育科の武道領域の指導内容に他領域同様の「技の名称や行い方」だけでなく、「武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方（行動の仕方）」が明示されている。

しかし、武道の位置づけとして「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり」と踏まえながらも、「相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」と他のスポーツ領域と変わらない内容を示しているため、指導内容としては技術指導を中核に据えることが要求されているといえる。

武道経験のない中学や高校の教師は多く、柔道や剣道の講習会に参加したり、外部講師を依頼することにより対応が始まった。一般的には、柔道や剣道の指導内容は技術指導が中心となって展開されていった（柴田，2008：岡嶋，2009：山口，2009）。

ほとんどのスポーツ教材は明治以降に受容された外来スポーツであり、それらのスポーツの変容・発展過程に日本人は参加しておらず、現在もその過程に主体的に関わっているとはいえない。武道は数少ない日本の運動（スポーツ）文化であり、他には日本泳法くらいしかない。この日本の運動文化を継承・発展させる主体は日本人であり、その過程こそが、スポーツ発祥・発展の欧米諸国と同様に運動・スポーツを理解することにつながる。

学習指導要領記載の「武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方（行動の仕方）」は、解釈次第では、単なる過去の武術・武芸・礼法の知識ではなく、文化継承・発展の主人公を育てることにもなるのである。一方、極稀ではあるが「文化学習」と捉えた実践も行われてはいる（小山，2009）。

武道の範疇にあっても柔道、剣道、空手道の向かう行方は各々異なっている。例えば競技としてみると、柔道は1964年からオリンピック種目に、空手道は2020年オリンピック種目に、そして剣道は賛否両論がある。各々の「道」の行方が国際化、オリンピック競技化、日本運動文化としての継承・発展に影響していくと思われる。

また学校体育授業では武道が必修化され、その指導内容・方法が検討・実施されているが、「道」の何を教えるのか、また武道としての共通内容としての実践は行われていない。

そこで本研究では、教材対象となる武道のうち（空手道、柔道、剣道）の各々の「道」の行方を検討し、そこから武道教材の学習指導内容についての示唆を得ることを目的とした。

## II 研究方法

本研究の目的を果たすため、まずは、空手道、柔道、剣道の過去から現在までの普及・発展状況について振り返ることとした。そこでは特に、海外への普及・発展状況に着目することで「道」の方向性に関する特徴を明らかにすることとした。

次に、上記の検討を踏まえて、学校体育における空手道、柔道、剣道の授業において学習させるべき「道」の内容とは何かについて考察した。

以下では、空手道、柔道、剣道の順で、それぞれの普及・発展状況及び学習指導内容の検討、考察結果について述べる。

## III 結果

### 1. 空手道の現在までの動向と将来の行方

#### 1) 空手道の普及と国際化

空手発祥の地は、琉球（沖縄）といわれており、その当時は「唐手（トウデー）」と呼ばれていた。その特徴としては、身にいっさいの武器を持たずに、突き、蹴り、打ちなど全身のあらゆる部位を使って外敵から身を守る「徒手空拳」としての武術を、師匠から弟子へと継承してきた。この技術発展の背景には、二度にわたる「禁武政策」があり、護身的手段として体系化されたものが唐手（空手）であった。ゆえに「空手に先手なし」といわれている（岸野，1994）。

唐手（空手）の派生としては、1922年に第1回体育展覧会で「船越義珍」が形の演武を披露したのが「唐手の本土初公開」といわれている（岸野，1994）。その当時、船越義珍が最初に著わした「琉球拳法唐手」には「青年の生命は元気である。元気は武によって鼓吹される。元気あふれて善となり、（略）唐手も善用すれば身を護り弱者を保護する（略）威あって猛からず、（略）謹慎と謙譲は唐手修行者の最大の美德。」と書き記されている。すなわち「青年の元気を空手修行で善に導き、身を慎み謙譲の心を持つ有為な人材を育てることができるのが空手」と読み取ることができる（小山，2011）。このことから、すでに「武

術」としての唐手ではなく、人格形成を主とした「武道」としての空手の普及・発展を目指していたと考えられる。

その後、1924年には慶應義塾大学、1926年には東京帝国大学で唐手研究会が発足し、大学生を中心に急速に普及・発展した。1929年になると、慶應義塾大学唐手研究会の学生達は、臨済宗鎌倉円覚寺の管長古川堯管道から仏教の教えである「空」の意味、「空手（くうしゅ）」の語の内容について教えを受け「唐手」から「空手」へ改称することを宣言した。船越義珍は学生達の進言を受け入れ、1935年に著わした「空手道教範」により「唐手」から「空手」へ改名することを公にした（岸野、1994）。

そもそも日本本土に伝来した当時の唐手には、流派・会派は存在しなかった。しかし、1935年に大日本武徳会が開催する武徳祭で、演武する空手家に対し、流名を名乗ることを要請したことに始まったといわれている。現在にいたる過程の中で、4大流派といわれてきたのは「松濤館流」「和道流」「糸東流」「剛柔流」であるが、この4大流派からも多くの流派・会派が派生している（岸野、1994）。このことは、流派・会派の独自の思想、技術発展・普及を促進させたが、逆により多くの流派・会派が存在するがゆえに「競技（スポーツ）としての空手」の発展を遅らせた要因の一つになったと考えられる。

1950年になると、学生達の気運の高まりに伴い、流派・会派の垣根を超えた「日本学生空手道連盟」が結成され、1957年には、成文化された試合・審判ルールに基づき「第1回全日本学生空手道選手権大会」が開催されている（岸野、1994）。この1950年代は、空手道指導者達がブラジル・フィリピン・アメリカ・メキシコ・アルゼンチン・イタリア・イギリス・ドイツ・フランスなど、世界各国に渡り普及活動を行っており、空手の「国際化」に多大なる貢献をもたらしている（岸野、1994）。まさに、この時代は「武道空手」から「スポーツ空手」へ派生する過渡期であったと思われる。

1969年になると、流派・会派を統括する「全日本空手道連盟（JKF）」が設立され「第1回全日本選手権大会」を開催している。また、その翌年の1970年には、世界33カ国の代表が参加し「世界空手道連合（WUKO）」を結成し、「第1回世界空手道選手権大会」を日本武道館で開催している（岸野、1994）。今日の空手道は、192の国と地域が加盟しており、2020年に開催される東

京オリンピックの正式種目として決定し、まさに世界の「KARATE」として発展・進化を遂げた。空手は時代の変化と共に、護身のための「武術空手」から人格形成のための「武道空手」へ、そして、国際的に普及・発展した「スポーツ空手」へと変貌した。

いつの時代も、空手は「型」の中に精神と技術を集約し継承してきた。「型」とは、技術の精髓を集約し段階的に体系化されたものであり、機能的にも形態的にもぎりぎりに単純化し洗練された法則性や規則性を持ったものである（杉山、2002）。

この「型」は「国際化」「オリンピック競技化」されることにより、空手の技術は成熟し洗練されてきたが、それと同時に「武道空手」としての本来の精神と技術が稀薄化するのではないかと懸念される。

## 2) 体育授業における「道」の内容について

平成24年度からの学校体育武道必修化に伴って、空手道は全国212校（平成28年6月15日現在）の中学校で採用されている（全日本空手道連盟、2016）。「道」を教科体育の中に必修とした位置づけは、我が国発祥の伝統文化を尊重する観点からではあるが、具体的な目標として「健康安全を最優先させ伝統文化を体験させる」「礼を重んじその形式を学ぶ、礼は自己を制御するとともに相手を尊重する態度を形に表す」ことなどが挙げられる（日下、2015）。

空手道の学習内容としては、武道を学ぶ意義や「礼」についての考え方、仕方を正しく学習させるなど「基本」を重視することから始まる。そして、礼法・立ち方・突き・蹴り、受けなどの「基本動作」を習得させ、空手特有の「形技能」「对人的技能（約束組手・自由組手）」へと発展させる（日下、2015）。

「形」とは、突き・蹴り・受けなどの動作を組み合わせ、相手の動きを想定し、攻防する技能をひとつの流れとして構成したもので、個人で演武したり集団で演武したりすることができるようにになっている。また、集団演武の学習形態をとることによって、上達の楽しみや達成感を味わわせることが出来るうえに協調性の向上なども期待できる。「形」の習得過程では、教わる・覚えることを要求されるため、できないことを出来るように繰り返す、上手い出来ない時は工夫をするなど、自分自身を磨き上げるための技能的要素や精神的要素が多く含まれているので、自分に向き合うた



めの手段と達成方法を学び、形技能と自己管理力を身につけることができる。

「対人的技能（約束組手・自由組手）」とは、今まで修得した技能を組み合わせ、相手をつけて技の攻防を行うものである。そのため、体格の差だけではなく、性格の強さや弱さも顕著に表れる。「組手」は技の攻防が瞬時に行われるため、相手との距離感（間合い）、タイミング（呼吸）を理解し、臨機応変に対応する対人的技能と危機管理力を身につけることができる。また、技の攻防のあいだには、怖さに向き合い、克服し、勇気を振り絞りながら相手に立ち向かう精神力を養うことができる。そして、相手によって変わる間合いの感覚を実感することにより、人は人によって違い、対応を少しずつ変えねば適正に対応することはできないことなど「相手を尊重する心」や「克己心」を学ぶことができる。このことは、相手と向き合いながら自分とも向き合い、空手の稽古をつうじながら、自己研鑽（人間形成）に努めることができると考えられる。

空手道は、両手両足をバランスよく使う全身運動であり、授業を通して基本動作や形技能、集団的技能、対人的技能、自己管理力、危機管理力を修得することができる。また、場所・服装を選ばず、用具もいらない。そして、身体的接触が少ないため、男女共修で実施でき、傷害の発生が極めて少ない教材であるとされている。

## 2. 柔道の現在までの動向と将来の行方

### 1) 柔道の普及と国際化

柔道は、1882年に嘉納治五郎によって創始され、2010年には199の国と地域が国際柔道連盟（以下、IJFと記す）に加盟しており、サッカーと同様、世界に広く普及している（全日本柔道連盟、2010）。柔道の国際化は、1964年に開催された東京オリンピックが大きな転機となった。それまで柔道は、体重制限を設けずに無差別で行われていたが、東京オリンピックでの採用が決定したことをきっかけに、IJF総会の決議を経て無差別級を含む4階級による階級別制が導入された。

さらに、1999年にイギリスで開催されたバーミンガム世界選手権大会からは、カラー柔道衣や女性の白線なしの黒帯が採用された。カラー柔道衣の考えを最初に提唱したのは、東京オリンピック無差別級の優勝者のアントン・ヘーシンクである。1988年にスペインで開催されたヨーロッパ選手権大会では、初めてブルーの柔道衣が採用された（尾形他、1997）。日本は伝統的に使用され

ている「白」を支持していたが、1997年10月のIJF総会では賛成127、反対38でカラー柔道衣の採用が決定した（尾形他、1997）。

また、1995年にIJFの会長選挙が行われ、韓国のパクが就任したことも柔道の国際化を加速させ、柔道界に大きな影響を与えた（尾形他、1997）。パクは就任後の理事会において、当時の国際オリンピック委員会（以下、IOCと記す）会長であるサマランチの意見を積極的に取り入れた（尾形他、1997）。その意見とは、「①柔道を魅力あるものにし、近代的武道として発展させるために、テレビの役割は重要である、②次のオリンピックからIOCは収益配分をテレビの視聴率に応じて行う、③柔道だけがオリンピックスポーツのなかでユニフォームに色が無い」という3点であった（尾形他、1997:169）。

このような国際化の流れから、IJF試合審判規定もより観客や視聴者を意識したルール改正が行われるようになった。IJFは、観客や視聴者に高度な柔道の投げ技による攻防の醍醐味を味わわせるため、「ダイナミック柔道」を推奨した。一方、1996年にアメリカで開催されたアトランタオリンピックでは、投げ技の「技有」が「一本」と判定されるなど、大会全体で極端に軽い技の判定が目立ち、罰則は厳しくなった（尾形他、1997）。つまり、技の正確性よりも技をかけ続けることが求められるため、技の効果ではなく罰則により決着がついてしまう試合が多く見られるようになり、IJFの意向と逆行する現象が起こった。試合者は、5分間（女子は4分間）の試合で常に攻撃をしていないと指導が与えられるため、対人競技特有の攻防による「間」は見られなくなった。

この他にも、柔道の国際化によってドーピングや施設・用具等のさまざまな問題が浮かび上がってきた（尾形他、1997）。まず、ドーピングについては、ジュニア選手期から飲食を管理する意識を高め、飲み薬を使用する際は専門医に相談するなど、日常生活から適切な行動がとれるよう習慣化することが求められるようになった。また、畳や柔道衣は海外でも生産されているため、素材や作り方が異なることが技術にも影響を与えている。試合における公正という面から、畳の滑りやすさ、柔道衣の生地 hardness や襟の幅などを統一するため、IJF試合審判規定に明記されるようになった（尾形他、1997）。

### 2) 体育授業における「道」の内容について

学校体育における柔道は、1958年に欧米型

の競技スポーツと同次元の格技 (combative sports) 領域として位置づけられた (藤堂, 2007)。1989 年には、武道の伝統的な考え方を理解することが大切であるという趣旨から、武道 (martial arts) 領域に名称が変更された (藤堂, 2007)。

さらに、2008 年には中学校において男女ともに武道必修化が決定し、2012 年より完全実施されている (全日本柔道連盟, 2010)。

それでは、学校体育で教材として取り扱われている武道とスポーツは、どのような点で異なるのであろうか。ここからは、武道とスポーツの違いについて取り上げていきたい。

まず、柔道は 1882 年に嘉納治五郎が天神真楊流と起倒流の柔術を集大成して、心身の教育システムとして発展させた (藤堂, 2007)。つまり、柔道の起源は柔術であるという点において、欧米型の競技スポーツとは異なると言える。

次に、武道は「一本」完結型であることが、他のスポーツ種目と異なる点である (田中他, 2000)。このことは、「柔道や剣道では、自分にまだ余力があっても、相手に先に「一本」を取られてしまったら、その時点で試合は終了してしまう (田中他, 2000: 29)」ことを示している。

それでは、この「一本」を目指す心とはどのような心なのか、その背景について考えていきたい。近年の競技スポーツにおける柔道では、「勝負にこだわるならば、泥臭くても勝てばいい、美しくなくてもいい」という考え方を持つ者と、あくまでも「一本」を追求する者が、国内外を問わずしのぎを削って勝負している。柔道の試合中に「一本」と宣告されることは、相手が完全に抵抗できない絶体絶命の状態にあることを示しているため、その時点をもって勝負が決まったことを意味する。「一本」を追求することは、必勝の王道を追求するものであり、審美系の採点競技のように美しさを追求しているわけではない (全日本柔道連盟, 2009)。

オリンピックや世界選手権などの国際化された柔道の試合では、勝負にこだわる考え方と「一本」を追求する考え方が共存している。柔道の競技者やその指導者にとっても、勝つための柔道が先行するのか、「一本」を取るための柔道を追求していくのか、信念をもって取り組んでいく必要がある。その上で、相手との競り合いにも勝つ術を学んでいくことが重要ではないだろうか。

学校体育で初めて柔道を受講する中学生にとって、柔道はオリンピック種目としてメダルの獲得

が期待できる競技スポーツとしての印象が強いであろう。そのため、学校体育の授業では武道とスポーツの違いについて、①柔道の起源は柔術であること、②武道は「一本」完結型であること、という上記 2 点での理解が求められる。

中学校における柔道の授業では、礼法や受け身、投げ技や固め技の基本動作を学習する。さらに、対人的技能を習得するためには取りと受けの協力が必要である。柔道の稽古には、受け身、乱取り (自由練習)、試合、形の 4 つの項目が挙げられる。競技スポーツとして柔道に取り組んでいる競技者にとっては、実践練習の乱取りと試合が稽古の中心となるであろうが、初心者のみならず熟練者にとっても、受け身と形を身に付けることが重要であることを見逃してはならない。形の稽古では、取りと受けがお互いに協力することで、崩し・つくり・掛けという柔道における技の理合いを学ぶことができる。受けは、取りのために最高の受け身をとることで、取りの技を引き立てることができる。また、受けが上手に受け身をとるためには、崩しや投げる方向など技の理合いを十分に理解している必要がある。

一方、取りは投げた後も姿勢を崩すことなく、引き手を引くことによって、受けの頭部や身体を守ることを学ぶのである。このように、受け身と形を学ぶことを通して相手の痛みを理解し、お互いに対人的技能の向上を目指して協力する姿勢が養われるのである。

中学校の授業では、単元時数が限られているため、受け身や形の習得に十分な時間を確保することが難しいのが現状である。受け身を習得することは、柔道による怪我や重大事故を回避させ、その他の体育実技でも起こりうる接触による転倒などの怪我の回避にも有用である。今後の課題としては、柔道における対人的技能の習得を通して相手の痛みを理解し、協力して成長していく態度を身につけるため、授業内容の精選や改善が求められる。

### 3. 剣道の現在までの動向と将来の行方

#### 1) 剣道の普及と国際化・国際的普及

今日の剣道について全日本剣道連盟 (2008) は、戦技を修練する日本刀による剣術から老若男女や国内だけでなく国外へと普及している運動文化であり、日本文化の結晶であると表現している。

剣道の競技的特性は、面、小手、胴、垂れからなる剣道具と剣道着、袴をまとい、竹刀を使って



相手と面・小手・胴・突きからなる4つの打突部位の攻防を展開するところにある。攻防により目指すところは有効打突を奪うこと、奪われぬことである。有効打突となる攻撃は、「充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」といった要件が定められている (International Kendo Federation, 2003: 5)。

有効打突の要件の中には、竹刀が刀 (日本刀) の代価物であるという考え方が強く反映されている。例えば、「竹刀の打突部」は、物打 (ものうち) とも呼ばれ、「最も力が有効に作用する刃部」と説明されている (全日本剣道連盟, 2000: 65)。また、「刃筋正しく」とは、「竹刀の打突方向と刃部の向きが同一方向である場合」と規定されている (International Kendo Federation, 2003: 5)。このように剣道では、ただ単に自分の竹刀で相手の面や小手などを打てば有効打突となるものではない。自分の竹刀のどの部分 (打突部と向き) で相手を打突したかといった刀の特徴に基づいた竹刀操作が求められる。

有効打突において求められるのは現象面のことのみではない。福本 (2003: 46) は、有効打突を「理合に適った打突」と置き換えて説明している。それは打突が繰り返されるまでの相手とのやりとりの過程を重視するものであり、「心の隙 (驚く、恐れる、疑う、惑うなどして生じる隙)」「動作の隙 (相手が動作を起こそうとするとときに生じる隙)」「構えの隙 (攻められた結果構えが崩れることにより生じる隙)」を相手に生じさせ、あるいは捉えて打突することと説明されている (福本, 2003: 46)。

このように剣道の場合、刀の特徴に基づいた竹刀操作に加え、打突する側とされた側の心身の状態などが有効打突の判断の基準となる。このような点に他の競技とは異なる剣道の競技的特性が垣間見られる。

有効打突の判断や判定について Honda (2006: 53) は、上記の要件を満たした打突を認識したり、多くの人と共感したりできるようになるには長く激しい修練が求められることを指摘している。また、このような有効打突の判定の難しさは、香田ら (2005: 74) が指摘するように、剣道のわかりづらさや剣道の国内外への普及を妨げる要因の一つとなっているものと思われる。

一方、剣道の「道」の方向性を国外への普及という点から概観すると、剣道の場合、「国際化」ではなく「国際的普及」のスタンスが重視されて

きた。塩入 (1992: 250) は、岸野 (1989) を引用するとともに、武道の国際化について2つの方向性を挙げている。1つは、「スポーツ化」の考え方によるものであり、競技の近代化を図り、世界のどこにおいても公認された一定のルールに従って競技が行われているようになることを目指すものである。塩入 (1992: 250) によるとこれは、剣道においてルールなどを世界中の人々にわかりやすいように、あるいは好みに合うように変更することを含む考え方である。もう1つの方向性は、それぞれの民族や人類によって形成された文化の独自性、固有性を尊重し、また、その多様性を認めるものであり、剣道においてこれは、世界の人々の好みに合うように変形させるのではなく、彼らを「日本化する」立場をとるものである (塩入, 1992: 250)。

諸外国の中には、「国際化」の立場を取り、剣道のオリンピック競技への参加を目標に掲げているところもある (ベネット, 2005: 小田・近藤, 2012)。しかしながら、全日本剣道連盟 (発行年不明) は、同連盟のHPを通じて「剣道に関する全剣連の見解」として、「国際的普及」のスタンスを重視し、その理由として、日本独特の文化・武道である剣道を正しく普及させたいという考え方を示している。この場合正しい普及とは、日常の稽古や試合という競技の剣道を通じて、武士の精神を多くの人々に伝えることであり、単なる競技として広めることではないとしている。

1970年の国際剣道連盟 (IKF: International Kendo Federation, 2006年5月よりFIK: Fédération Internationale de Kendoに変更) の発足時、同連盟への加盟国・地域は17か国・地域であった。45年が過ぎた2015年の時点で57か国・地域にまで増加している (International Kendo Federation, 2016)。3年に1度開催される世界剣道選手権大会 (World Kendo Championships) も1970年の第1回大会開催以来、2015年には第16回大会を数えるまでになった。このような競技的な歴史を重ねつつも国際剣道連盟は、日本の国際的普及のスタンスに基づき、表立ったオリンピック競技参加への意志や動きをこれまでに見せていない。

## 2) 体育授業における「道」の内容について

上記の全日本剣道連盟の見解の中の「武士の精神」とはどのようなものを意味するのであろうか。

武士の精神といえば、「武士道」が真っ先に挙

げられる。清水（2016）は、日本武道学会第49回大会記念講演の中で、武士の精神とは日本精神全体を覆うわけではないが、日本精神の長所が最もよく発揮されたものと説明している。具体的には、室鳩巢の「士説」を引用し、武士道の精神の根本は「義」にあると指摘している。またその他にも、「士の道は義より大なるはなし。義は勇によりて行われ、勇は義によりて長ず」とする吉田松陰の「士規七則第三条」、「道の実現のためには義によらざるべからず。義の徹底の為に勇を用いざるべからず」とする山鹿素行の「武教本論」、さらには、「武士道の基本は「フェア・プレイ（義を貫くこと）」とする新渡戸稲造の著書「武士道」を引用し、日本人の生き方を支えた精神と捉えている。

現代において「義」とは、「道理、条理、物事の理にかなったこと、人間の行うべき道筋」とされている（新村，1991：599）。また、「義」は単独で使われるよりも、正義、情義、大義、道義、節義、忠義、仁義、信義、恩義、義理、義務、義憤、義侠、義士、義民、義挙といったように他の漢字と結び付いて使用される場合が多い。その場合においても「人間としての正しい道」といった義の根本を外れて結び付くことはないものといえる。

以上より、全剣連の見解で示される武士の精神とは、義、即ち、人間としての正しい行いを実践し、貫こうとする精神と考えられる。また、剣道の修練や競技を通して、そのような精神を養うことを目指すのが日本の固有の運動文化である武道としての剣「道」であり、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の『道』である」とする理念の背景にあるものと捉えられる。

その一方、近年の外国人修練者・武道学識者らを交えての議論の中では、剣道を含む武道の「固有性」とではなく、「普遍性」を語っていくべきとの声も上がっている。ベネット（2011：5）は、武道が日本の歴史や文化から生まれたことは事実であるとしながらも、武道の固有性を（スポーツとの対比の中で）ことさらに強調することは、文化帝国主義やエリート主義につながりかねない危険性や、文化的劣等感を補うものとして捉えられる可能性を指摘している。その上で、ベネット（2011：5）はまた、人種や宗教に関係なくあらゆる文化の人々が理解し、敬愛することができる「普遍性」としての武道の「美」を重視する考えを示している。

その「美」とは、姿かたちの美しさに加え、価

値の問題として捉えられる。例えば、中林（1994：223-224）は、武道とスポーツの技術の捉え方の違いとして以下のように説明している。

スポーツは、規則の境界線に向かって、中から外へ外へと技術が開発され、訓練されていく。武道は、罰則規定ぎりぎりの所で行われる技術を決して高度で有効なものとして評価していない。なるべくその規定に触れない離れた所、いわば罰則規定の境界線から中へ中へと技術は求められ、錬磨されるのである。より正しく、より美しくという価値が問題となる。

ベネットの発するところは、上記のようなこれまで日本の武道の「固有性」として打ち出してきた考え方を、国や地域、民族、文化などの違いを超えた世界中の修練者に共通に価値あるものと発していくべきとの考え方であるものと捉えられる。

2008年の学習指導要領の改訂以来、中学校の第1学年及び第2学年で武道は他の領域と同様に必修とされている。武道の中の剣道の授業を通しては、剣道は日本で誕生し、様々な歴史の変遷とともに変化し、昇華してきた日本文化の結晶であること、そして、上記のような普遍的価値を備えた運動文化であることを発信していきたい。

では、学校体育において「義」の精神に基づいた、正義を求め、実践する素養はどのように培われるのであろうか。言い換えればそれらは、学習者に理解されるため、実践を促していくために、どのような具体的内容に精選され、具体的な言葉に置き換えられ、また、系統化されるべきなのであろうか、さらに、時間数や教員の専門性など、様々な制限がある中で競技性と精神性を結び付ける授業展開はどのように可能となるのであろうか、ということ我问うことになる。

学校体育の剣「道」の何を、具体的にどのように教えるか。この「道」の行方をさらに探していきたい。

#### IV まとめ

本研究は、空手道、柔道、剣道の三道に着目し、現在までの普及と国際化、国際的普及の過程について振り返り、またそこから、体育授業において学習させるべき「道」の内容とは何かについて示唆を得ること及び考察することを目的とした。

それぞれの武道においては、競技化、スポーツ化、オリンピック化への方向性に進む国際化や、固有性あるいは固有性をもとにした普遍性を打ち

出していく国際的普及といった国外への広がり方や広め方がることが明らかとなった。その一方で、普及の方向性に違いはあるとしても、どの武道においても共通して、技の習得への取り組みを通して心身を鍛錬し、人としての正しい振る舞いや態度の育成といった自己形成を図っていくことが最大の目的としてあることが確認された。

学校体育の武道における「道」の内容に焦点を当てた本研究の場合、例えば、空手道においては、相手と向き合うことを通して自分とも向き合い、相手を尊重する心や克己心の育成が挙げられた。柔道においては、相手の痛みを理解し、協力して成長していく態度が、剣道では「義」の精神に基づいた、正義やフェア・プレイを求め、実践する素養が挙げられた。

このような心や態度、素養については、それぞれの武道の学習に励めば自然と身に付き、自己形成が図られていくわけではない。ましてや、武道の授業において体育の授業範囲を跳び越えた自己形成論を振りかざすべきではない。

武道は本来、自分はこうしたい（突きたい、蹴りたい、投げたい、抑えたい、打ちたい）が、相手にはそうさせたくはない両者が対峙して攻防を展開するという特性を備えている。これは一見すると互いを否定し合う関係とも捉えられる。しかしながら、修練や学習、さらには「試し合う」という言葉の通り、試合といった中での両者の関係性は対立的なものではなく、肯定的で協働的なものである。中学校学習指導要領解説（保健体育編）においても、態度に関する記載の中で、仲間の学習の援助、仲間の学習を援助することによる自分の能力の高まり、仲間との連帯感の高まりといった両者の関係性が示されている（文部科学省、2008）。前述の三道それぞれの「道」の学習を実現するための共通項として、武道における相手の存在についての捉え方が重要となってくる。

基本動作や基本となる技の学習の過程においては、様々な自分に気付く「自己発見」の段階が存在するはずである。それは、「自己形成」の重要な前段階となるものであり、「自己発見」の背景には、様々な自分に気付かせてくれる同じ道の修練者、すなわち、仲間や指導者の存在があるはずである。

例えば、剣道では「打って反省、打たれて感謝」という教えがある。剣の道を歩む者同士は「助け合い、高め合う」仲間であり、倒すべき敵という考えではない（Honda, 2012）。剣道のみならず他の武道においても、学習者同士が協働的に

取り組み、仲間の存在が互いに与える影響の実感があってこそ、「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとする」ことが図られ、「伝統的な考え方」の理解が促されるものといえる。武道の学習過程においては、このような考え方に触れ、それぞれの道の内容の意義の理解とともに実践へとつなげていく方法が検討されなければならない。それは、教師から一方的に教え込むやり方ではなく、学習者の実感に基づいた真の理解と授業の空間を越えた実践を目指して、適切な状況や場を設定すべく工夫が図られるものであるべきである。今後の課題として取り組んでいきたい。

## 引用・参考文献

- アレキサンダー・ベネット（2005）剣道の黒船－韓国：剣道の国際化とオリンピック問題，山田奨治，アレキサンダー・ベネット編，日本の教育に武道を：21世紀に心技体を鍛える，明治図書：336-359.
- アレキサンダー・ベネット（2011）武道の「固有性」と「普遍性」，武道学研究，第44巻別冊：5.
- 福本修二（2003）0からわかる剣道審判法，体育とスポーツ出版社.
- 日下修次（2015）平成25年度中学校空手道授業資料，（公財）全日本空手道連盟：1-3.
- Honda, S. (2006) Kendo Inside Out – footwork and cutting –, Kendo World, Vol. 3, No. 3: 52-55.
- Honda, S. (2012) Kendo – Approaches for All Levels –, Bunkasha International.
- International Kendo Federation (2003) The Regulations of Kendo Shiai and Shinpan The Subsidiary Rules of Kendo Shiai and Shinpan The Guidelines for Kendo Shiai and Shinpan.
- International Kendo Federation (2016) The establishment of FIK, <http://www.kendo-fik.org/english-page/english-page2/What-is-IKF.htm> (参照日 2016/12/23) .
- 岸野雄三（1994）最新スポーツ大事典（第5版），大修館：186-191.
- 岸野雄三（1989）国際化時代の日本武道，第1回国際武道文化セミナーテキスト：80-89.
- 香田郡秀・吉谷修・有田祐二（2005）剣道における有効打突の構成要素に関する研究－現代的意義と視点の設定，筑波大学体育科学系紀要，28：73-78.
- 小山正辰（2011）空手道の教育力，BAB ジャバ



- ン：13-14.
- 小山吉明（2009）いま体育教師は武道の必修化にどう向き合うべきか，体育科教育，Vol. 57, No. 15：11-13.
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 保健体育編，東山書房.
- 中林信二（1994）武道のすすめ，島津書房.
- 新村出 編（1991）広辞苑第四版，岩波書店.
- 小田佳子・近藤良享（2012）日本剣道 KENDO の国際展開への課題－韓国剣道との相克を中心に－，体育・スポーツ哲学研究，34(2)：125-140.
- 尾形敬史，小俣幸嗣，鮫島元成，菅波盛雄（1997）競技柔道の国際化－カラー柔道衣までの40年－，不昧堂出版：東京，72-73，164-169，189-193.
- 岡嶋恒（2009）誰でも指導できる剣道の授業モデル，体育科教育，No. 57, Vol. 15：22-24.
- 柴田一浩（2008）ダンスと武道の必修化で直面する課題をどう解決するか，体育科教育，No. 56, Vol. 6：40-43.
- 清水潔（2016）日本精神と武士道，日本武道学会第49回大会（於 皇学館大学，2016/0907）記念講演資料.
- 塩入宏行（1992）剣道の国際化を考える，全国教育系大学剣道連盟編，ゼミナール現代剣道，窓社：249-257.
- 杉山重利（2002）武道論十五講，不昧堂出版：19.
- 田中守，藤堂良明，東憲一，村田直樹（2000）武道を知る，不昧堂出版：東京，29-31.
- 藤堂良明（2007）柔道の歴史と文化，不昧堂出版：東京，3, 187.
- 山口香（2009）学習者が楽しく意欲も持って取り組める柔道の練習法，体育科教育，Vol. 57, No. 15：26-29.
- 全日本柔道連盟（2009）柔道への想い 伝え継いでいきたい柔道の心，公益財団法人全日本柔道連盟：東京，4.
- 全日本柔道連盟（2010）柔道授業づくり教本 中学校武道必修化のために，公益財団法人全日本柔道連盟：東京，13.
- 全日本空手道連盟（2016）5）あゆみ，Vol.13：14.
- 全日本剣道連盟（2000）剣道 和英辞典，サトウ印書館.
- 全日本剣道連盟（2008）剣道指導要領，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟，剣道に関する全剣連の見解（発行年不明），<http://www.kendo.or.jp/kendo/origin/>（参照日 2016/08/16）.

